

城の作事 狭間 ガイド

狭間(さま)とは、

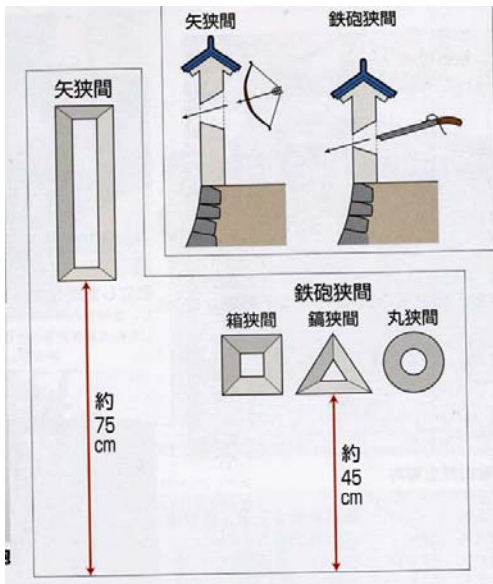
狭間とは天守や櫓・土塀の壁面に設けられた矢や鉄砲を放つために空けられた穴のことをいう。城に攻め寄せ敵兵を攻撃するための重要な仕掛けであった。狭間とは元来「すきま」の意から生じたのぞき穴ということができる。

狭間の形状と名称

狭間の形は、長方形・正方形・三角形・円形であるのが通常であるが、まれには多角形なるものもあった。長方形のものが矢狭間、正方形のものが鉄砲狭間と呼んだ。三角形のものを三角狭間、円形のを丸狭間といった。形は様々であるが、その開口は敵に向かう外側は小さく、内側は大きくなっている。矢狭間は内側が横15cm×縦45cm、鉄砲狭間は内側15cm×15cm四方程度が標準であった。矢狭間は、弓を立てて引くことが基準になるので床面から狭間の下辺までが約75cm、鉄砲狭間は片膝をついて構えるため床面から狭間の下辺までは約45cm位の場所に設置されていた。射る位置から、前者を立狭間(たちざま)、後者を居狭間(いざま)ともいっている。



狭間からねらっているところ



狭間の構造

狭間には、木板の枠取りがされている。その枠は外側に対して内側の口を大きくし、外側から矢や鉄砲玉が内側に入りやすくすると同時に、内側から攻撃するための視界の確保をはかっている。この技法を「アガキ」と

呼んでいる。アガキを下方や横方向にゆがませることで、重要地点に掃射方向を集中させることも可能であった。

アガキ



狭間の軍学



江戸軍学によると「塀一間に狭間一つ」が定法とされていた。以前の中世末期の『築城記』によれば、「一町の面に三〇、四町で一二〇」が適当とされていた。一町は60間なので、2間に狭間一つということになる。松本城の天守の狭間は、ほぼ一間に一つ開いている。確かにねらってみると、2間に一つでも死角はできないが、より死角をなくし、手元の視野の確保となると矢狭間と鉄砲狭間の交互の一間毎の組み合わせによってのほうが視界確保が安全といえる。

松本城天守の狭間

(1) 柱と柱の間に穿(うが)たれた狭間(銃眼)の数

	矢狭間	鉄砲狭間	合計
天守	40	37	77
乾小天守	16	12	28
渡櫓	2	3	5
辰巳附櫓	2	3	5
合計	60	55	115

松本城天守の狭間は、矢狭間(長方形)と鉄砲狭間(正方形)の2種類である。矢狭間は弓矢専用とは限らない。大天守1階の矢狭間の床から狭間下部までの高さは75cmはない。つまり矢は引けないということになる。従って**鉄砲狭間と同じ銃眼の役割を果していた**と言う事

になる。天守全体では**115の狭間**を数える。

(2) 狭間の並び・・・ 死角をなくすための狭間の付け方



天守東面にみる狭間の付け方

矢狭間 鉄砲狭間 矢狭間の並び方(パターン)
(交互)

特に屋外では、火縄銃が雨で使用できないことを想定して、それに備えてと思われるが、射るには困難。したがって銃眼になる。

天守南面の狭間の付け方

矢狭間 鉄砲狭間 矢狭間の並び方

天守の場合、床面から狭間までの高さはまちまちである。

乾小天守の狭間の付け方(東面)



矢

矢狭間 鉄砲狭間 矢狭間の並び方

矢狭間・鉄砲狭間・矢狭間の並び方によって、**足元(手前)の死角**をできるだけ少なくする。

およそ1間に一つの狭間を穿つことによって**横方向への死角**をできるだけ少なくするためと思われる。

さに**実戦用に備えた狭間の付け方**といえそうである。

(3) 土塀の狭間(「松本御城絵図」・「二の丸絵図」河辺家文書による)

黒門付近の土塀

土塀には、四角形と丸形の狭間が開く。(安永5年:1776)



土塀の狭間(寛保2年:1742)の数

・御本丸 塀	190間程	狭間	232
・二の丸 塀	346間程	狭間	462
・三の丸 塀	1078間程	狭間	1438
合計	1614間		2132